

日本短篇文学全集 11

篇文学全集
11

藤村
白鳥
和郎



責任編集 臼井吉見

筑摩書房

日本短篇文学全集 第11巻

昭和43年10月5日第一刷発行

島 崎 藤 村

著 者 正 宗 白 鳥

広 津 和 郎

発行者 竹之内 静雄

発行所 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8

郵便番号 101—91

電話 東京(291)7651

振替 東京4123

製版・明和印刷

印刷・多田印刷

製本・鈴木製本

定価 360円

目次

島崎藤村

ある女の生涯 三

三人 四

伸び支度 八

正宗白鳥

妖怪画 三

玉突屋 一〇

髑髏と酒場 二三

本能寺の信長 三〇

今年の秋	二〇
一つの秘密	二二
リー兄さん	二六

広津和郎

巷の歴史	二九
幽霊列車	三四
砂に残された文字	三四
海の色	三三
鑑賞(渋川 驍)	三二

装幀 枊折久美子

島
崎
藤
村

島崎藤村（一八七三—一九四二）

明治五年三月二十五日長野県神坂村馬籠に生れた。家は代々馬籠宿の本陣・庄屋の家柄であった。明治十四年長兄に伴われて上京。明治学院を卒業し明治女学校教師となる。「文学界」発刊に蘧谷らと参画。仙台、小諸で教師をした。明治三十年「若菜集」刊行。三十九年「破戒」を自費出版、絶讀され作家的位置を確立した。「春」「家」を新聞に連載し、大正二年には渡仏、昭和六十年「夜明け前」を完成した。十八年「東方の門」を執筆中に倒れ八月二十二日永眠。日本の近代文学を代表する文豪で、他に詩集「一葉舟」「夏草」「落梅集」、長篇「桜の実の熟する時」「新生」、短篇集「緑葉集」「藤村集」「嵐」、童話・隨筆など多くの著作がある。

ある女の生涯

おげんはぐっすり寝て、朝の四時頃には自分の娘や小さな甥おいなぞの側そばに眼をさました。慣れない床、慣れない枕、慣れない蚊帳かやの内なかで、そんなに前後も知らずに深く眠られたというだけでも、おげんに取ってはめずらしかった。気の置けないものばかり——娘のお新に、婆やに、九つになる小さな甥まで入れると、都合四人も同じ蚊帳の内に枕を並べて寝たこともめずらしかった。

八月のことで、短か夜を寝惜むようなお新はまだよく眠って居た。おげんはそこに眠っている人形の側でも離れるようにして、自分の娘の側を離れた。蚊帳を出て、部屋の雨戸を一二枚ほど開けて見ると、

夏の空は明けかゝって居た。

「ようやく来た。」

とおげんは独りでそれを言ってみた。そこは地方によくあるような医院の一室で、遠い村々から来る患者を容いれるための部屋になって居た。蜂谷という評判の好い田舎医者がそこを経営して居た。おげんが娘や甥を連れてそこへ来たのは自分の養生のためとは言え、普通の患者が病室に泊まったようにも自分を思っ居なかつたというのは、一つはおげんの亡くなった旦那がまだ達者でさかりの頃に少年の蜂谷を引取って、書生として世話したという縁故があったからで。

「前の日に思い立って、翌あす日は家を出て来るような、そんな旦那衆のようなわけにいかすか。」

「そうとも。」

「そこは女だもの。俺おれは半年も前から思い立って、ようやくこゝまで来た。」

これは二人の人の会話のようであるが、おげんは一人でそれをやった。彼女の内部にはこんな独語を言う二人の人が居た。

おげんはもう年をとつて、心細かった。彼女は嫁いで行つた小山の家の祖母さんの死を見送り、旦那と自分の間に出来た小山の相続人でお新から言えば唯一人の兄にあたる実子の死を見送り、二年前には旦那の死をも見送つた。彼女の周囲にあつた親しい人達は、一人減り、二人減り、長年小山に出入してお家大事と勤めて呉れたような大番頭の二人までも早やこの世に居なかつた。彼女は孤独で震えるように成つたばかりでなく、もう長いこと自分の身体に異状のあることをも感じて居た。彼女は娘のお新と共に——四十の歳まで結婚させることも出来ずに処女で通させて来たような唯一人の不幸なお新と共に最後の「隠れ家」を求めようとするより外にはもう何等の念慮をも持たなかつた。

このおげんが小山の家を出ようと思ひ立つた頃は六十の歳だった。彼女は一日も手放しがたいものと思うお新を連れ、預り子の小さな甥を連れ、附添の婆やまで連れて、賑かに家を出て来たが、古い馴染の軒を離れる時には流石に限りない感慨を覚えた。彼女はその昂奮を笑いに紛わして来た。「みんな、行つて来るぞい。」その言葉を養子夫婦にも、奉公人一同にも残して置いて来た。彼女の真意では、しばらく蜂谷の医院に養生した上で、是非とも東京の空まではとこゝろざして居た。東京には長いこと彼女の見ない弟達が居たから。

蜂谷の医院は中央線の須原駅に近いところにあつた。おげんの住慣れた町とは四里ほどの距離にあつた。彼女が家を出る時の昂奮はその道のりを汽車で乗つて来るまで続いて居たし、この医院に着いてもまだ続いていた。しかし日頃信頼する医者のもとに一夜を送つて、桑島に続いた病室の庭の見える戸戸

の間から、朝靄の中に鶏の声を聞きつけた時は、彼女もホッとした。小山の家のある町に比べたら、いくらかでも彼女自身の生れた村の方に近い、静かな田舎に身を置き得たという心地もした。今度の養生は仮令半年も前からおげんが思い立って居たこととは言え、一切から離れ得るような機会を彼女に与えた——長い年月の間暮して見た屋根の下からも、十年も旦那の留守居をして孤りの闇を守り通したことのある奥座敷からも、養子夫婦をはじめ奉公人まで家内一同膳を並べて食う楽しみもなくなったような広いがらんとした台所からも。

「御新造さま、大分お早いなし。」

と言つて婆やが声を掛けた頃は、お新までもおげんの側に集まった。

「お母さんは家に居てもあゝだぞい。」とお新は婆やに言つて見せた。「冬でも暗いうちから起きて、自分の部屋を掃除するやら、障子をばたく言わせ

るやら。そんなに早く起きられては若いものが堪らんなんて、よく家の人に言われる。わたしは隣の部屋でも、知らん顔をして寝て居るわいなし——えゝえゝ、知らん顔をして。」

お新はこんな話をするにも面長な顔を婆やの方へ近く寄せて言つた。

そこへ小さな甥の三吉が飛んでやつて来た。前の日にこの医院へ来たばかりでいろ／＼な眼についたものを一々おげんのところへ知らせに来るのも、この子供だ。蜂谷の庭に続いた桑畠を一丁も行けば木曾川で、そこには小山の家の近くで泳いだよりはずっと静かな水が流れて居ることなどを知らせに来るのも、この子供だ。

「桑畠の向うの方が焼けて居たで。俺がなあ、真黒に焼けた跡を今見て来たぞい。」

こんなことを三吉が言出すと、お新は思わずその話に釣り込まれたという風で、

「ほんとに、昨日のようにびっくりしたことはない。お母さんがあんな危ないことをするんだもの。炭俵に火なぞをつけて、あんな垣根の方へ投^ほつてやるんだもの。わたしは、はらくして見て居たぞい——ほんとだぞい。」

お新はもう眼に一ぱい涙を溜めて居た。その力を籠めた言葉には年老いた母親を思うあわれさがあつた。

「昨日は俺も見えて居た。そうしたら、おばあさんがこゝのお医者さまに叱られて居るのさ。」

この三吉の子供らしい調子はお新をも婆やをも笑わせた。

「三吉や、その話はもうしないで呉れ。」とおげんが言出した。「このおばあさんが悪かった。俺も馬鹿な——おおかた、気の迷いだらずが——昨日は恐ろしいものが俺の方へ責めて来るじゃないかよ。

汽車に乗ると、そいつが俺に随いて来て、こゝの蜂

谷さんの家の垣根の隅にまで隠れて俺の方を狙つてゐる。さあ、責めるなら責めて来いッて、俺も堪らんから火のついた炭俵を投げつけてやったよ。もうあんな恐ろしいものは居ないから、安心しよや。もうもう大丈夫だ。ゆうべは俺もよく寝られたし、御霊^{みたま}さまは皆を守つて居て下さるし、今朝は近頃にない気分が清々^{せいせい}とした。」

おげんは自分を笑うようにして、両手を膝の上に置きながらホツと一息を吐いた。おげんの話にはよく「御霊さま」が出た。これはおげんがまだ若い娘の頃に、国学や神道に熱心な父親からの感化であつた。お新は母親の機嫌の好いのを嬉しく思うという風で、婆やと三吉の顔を見比べて置いて、それから好きな煙草を引きよせて居た。

その朝から三吉はおげんの側で楽しい暑中休暇を送ろうとして朝飯でも済むとまた直ぐに屋外^{そと}へ飛び出して行つたが、この小さな甥の子供心に言ったこ

とはおげんの身に徹えた。彼女は家の方に居た時分、妙に家の人達から警戒されて、刃物という刃物は鉄はざらから剃刀かみそりまで隠されたと気づいたことがよくある。

年をとったおげんがつく／＼この世の冷たさを思い知ったのは、そういう時だった。その度に彼女は悲しさや腹立しさが胸一ぱいに込み上げて来て、わざわざ養子夫婦のいやがるように仕向けて見たこともある。時には白いハンケチで鼠を造って、それを自分の頭の上に載せて、番頭から小僧まで集まった仕事場を驚かしたこともある。あんなことをして皆を笑わせた滑稽が、まだ／＼自分の気の確かな証拠として役に立ったのか、「面白のおばあさんだ」として皆に迎えられたのか、そこまではおげんも言うことが出来なかった。とにかく、この蜂谷の医院へ着いたばかりに桑畠を焼くような失策があつて、三吉のような子供にまでそれを言われて見ると、いかに自分ばかり気の確かなつもりのおげんでも、これま

で自分のしたことで養子夫婦を苦しめることが多かったと思わないわけにはいかなかった。

お新は髪を束ね直した後のさっぱりとした顔付で母の方へ来た。その時、おげんは娘に言いつけて、お新が使った後の鏡を自分の方へ持つて来させた。「お父さんが亡くなつてから、お母さんは一度も鏡を見ない。今日は蜂谷さんにもよく診察して貰うで、久しぶりでお母さんも鏡を見るわい。」

おげんは親しげに自分のことを娘に言つて見せて、お新がそこへ持つて来た鏡に向おうとした。ふと、死別してから何十年になるかと思われるようなおげんの父親のことが彼女の胸に来た。おげんの手はかすかに震えて来た。彼女の父親は晩年を暗い座敷牢に送った人であつたから。

「ふーん。」

思わずおげんは唸うなるような声を出して自分の姿に見入った。彼女が心ひそかに映ることを恐れたよう

な父親の面影のかわりに、信じ難いほど変り果てた彼女自身がその鏡の中に居た。

「えらい年寄になったものだぞ。」

とおげんは自分ながら感心したように言つて、若かつた日に鏡に向つたと同じ手付で自分の眉のあたりを幾度となく撫で柔げて見た。

「ひどいものじゃないかや。何だか自分の顔のようないよ。」

とまたおげんは言つて、鏡を娘の方へ押しやつた後でも嘆息した。

「ふーんのようなことだ。」

とお新もそこへ笑いこぼれた。

静かな目がそれから続くようになった。蜂谷の医院に来て泊つて居る他の患者達のことには就いても、一番早くいろいろな報告をもつて来て、おげんの部屋を賑かすのは小さな甥だった。三吉が小山の家の方から通つて居る同じ学校の先生で、夏休みを機会

に鼻の療治を受けに来て居る人があると、三吉は直ぐそれを知らせにおげんのところへ飛んで来るし、あわれげな啞おろの小娘を連れて遠い山家の方から医院に着いた夫婦があると、それも知らせに飛んで来た。おげんはこの小さな甥やお新に誘われて木曽川の岸の岩石の間に時を送りに行つて来ることもあった。

夏らしい日あたりや、影や、時の物の茄子なすでも漬けて在院中の慰みとするに好いようなたくさん円い小石がその川岸にあった。あの小山の家の方で、墓参りより外にめつたに屋外とに出たことのないようなおげんに取つては、その川岸は胸一ぱいに好い空気を呼吸することの出来る場所であり、透きとおるような冷い水に素足を浸して見ることも出来る場所であった。おげんがその川岸から拾ひ集めた小石で茄子などを漬けることを楽しみに思つたのは、お新や三吉や婆やを悦ばせたいばかりでなく、その好い色に漬かつたやつを同じ医院の患者仲間に、鼻の悪い学

校の先生にも、啞の娘を抱いた夫婦者にも振舞いたいからであつた。彼女はパンを焼くことなぞも上手で、そういうことは好きでよくした。在院中の慰みの一つは、その家から提げさせて来た道具で、小さな甥のために三時^{おやつ}がわりのパンを焼くことであつた。三吉はまた大悦びで、おばあさんが手製のふかしたてのパンを患者仲間の居る部屋々々へ配りに行くこともあつた。

おげんが過ぎ去つた年月のことをしみく胸に浮べることできたのも、この静かな医院に移つてからであつた。部屋に居て聞くと、よく蛙が鳴いた。昼間でも鳴いた。その声は男ざかりの時分の旦那の方へも、遠い旅から年をとつて帰つて来た旦那の方へもおげんの心を誘つた。彼女が小山の家を出ようと思ひ立つたのは、必ずしも老年の今日に始まつたことではなかつた。旦那も達者、彼女もまだ達者で女のさかりの頃に、一度ならず二度ならずすでにそ

の事があつた。旦那くらい好い性質の人で、旦那くらいまた、女のことに弱い人もめづらしかつた。旦那が一旗揚げると言つて、この地方から東京に出て家を持ったのは、あれは旦那が二十代に当時流行の狽^{ちやう}虎の毛皮の帽子を冠つた頃だ。まだお新も生れないくらい前のことだ。あの頃にもう旦那の關係した芸者は幾人となくあつて、その一人に旦那の子が生れた。おげんがそれを自分の手で始末しないばかりに心配して、旦那の行末の楽しみに再びこの地方へと引揚げて来た頃は、さすが旦那にも謹慎^{きんしん}と後悔の色が見えた。旦那の東京生活は結局失敗で、そのまゝ古い小山の家へ入ることは留守居の大番頭に対しても出来なかつた。旦那が少年の蜂谷を書生として世話したのも、しばらくこの地方に居て教員生活をした時代だつた。旦那がある酌婦に關係の出来たのもその時代だ。その時におげんは旦那の頼みがたさをつくづく思い知つて、失望のあまり家を出ようと

したが、それを果さなかった。正直で昔気質な大番頭等へも詫の叶う時が来た。二度目に旦那が小山の家の大黒柱の下に坐った頃は、旦那の一番働けた時代であり、それだけまた得意な時代でもあった。地方の人の信用は旦那の身に集まるばかりであった。交際も広く、金廻りもよく、おまけに人並すぐれて唄う声のすばしい旦那は次第に茶屋酒を飲み慣れて、土地の芸者と関係するようになった。旦那が自分の知らない子の父となったと聞いた時は、おげんはまたかと思った。その時もおげんは家を出る決心までして、東京の方に集まって居る親戚の家を訪ねに行つたこともあったが、人の諫めに思い直して国へと引返した。あれほどおげんは頼み甲斐のない旦那から踏みじられたように思ひながらも、自分の前に手をついて平あやまりにあやまる旦那を眼前に見、やさしい声の一つも耳に聞くと、つい何もかも忘れて旦那を許す氣にもなった。おげんが年若な倅の利

発さに望みをかけ、温順しいお新の成長をも楽しみにして、あの二人の子によつて旦那の不品行を忘れよう忘れようとつとめるように成つたのも、あの再度の家出をあきらめた頃からであった。

そこまで思いつづけて行くと、おげんは独りで茫然とした。それからの彼女が自分の側に見つけたものは、次第に父に似て行く兄の方の子であり、まだこの世へも生れて来ないうちから父によつて傷けられた妹の方の子であったから。

回想はある都会風の二階座敷の方へおげんの心を連れて行つて見せた。おげんの弟が二人も居る。おげんの倅が居る。倅の姫も居る。その姫は皆の話の仲間入をしようとして女持の細い煙管などを取出しつつある。二階の欄のところには東京を見物顔なお新も居る。そこはおげんの倅が東京の方に持った家で、夏らしい二階座敷から隅田川の水も見えた。おげんが国からお新を連れてあの家を見に行つた頃は、

旦那はもう疾くにおげんの側に居なかった。家も捨て、妻も捨て、子も捨て、不義理のあるたけを後に残して行く時の旦那の道連には若い芸者が一人あったとも聞いたが、その音信不通の旦那の在所が何年か後に遠いところから知れて来て、僅かに手紙の往復があるようになったのも、丁度その頃だ。おげんが旦那を待ち暮す心はその頃になっても変らなかつた。機会さえあらば、どこかの温泉地でなりと旦那を見、お新にも逢わせ、どうかして旦那の心をもう一度以前の妻子の方へ引きかえさせたい。その下心でおげんは東京の地を踏んだが、あの倅の家の二階で二人の弟の顔を見比べ、倅夫婦の顔を見比べた時は、おげんは空しく国へ引返すより外に仕方がないと思つた。二番目の弟の口の悪いのも畢竟姉を思つて呉れるからではあつたらうが、しまいにはおげんの方でも耐えきれなくなつて、「そう後家、後家と言つて貰うまいぞや」と言い返して見せたのも、あ

の二階だ。そうしたら弟の言草は、「この婆さも、まだこれで色気がある」と。あまり憎い口を弟がきくから、「あるぞい——うん、ある、ある、」そう言つておげんは皆に別れを告げて来た。待つても、待つても、旦那はあれから歸つて来なかつた。国の方で留守居するおげんが朝夕の友と言え、旦那の置いて行つた机、旦那の置いて行つた部屋、旦那のことを思い二人の子のことを思えば濡れない晩はなかつたような冷い闇の枕——

回想はまた、広い台所の爐辺の方へもおげんの心連れて行つて見せた。高い天井からは爐の上に釣るした煤けた自在鍵がある。爐に焚く火はあか／＼と燃えて、台所の障子にも柱にも映つて居る。いそいそと立働くお新が居る。下女が居る。養子も改まつた顔付で奥座敷と台所の間を往つたり来たりして居る。時々覗きに来る三吉も居る。そこへおげんの三番目の弟に連れられて、しょんぼりと表口から入

って来た人がある。この人が十年も他郷で流浪した揚句に、遠く自分の生れた家の方を指して、年をとってから帰って来たおげんの旦那だ。弟は養子の前にも旦那を連れて御辞儀に行き、おげんの前へも御辞儀に來た。その頃は倅はもうこの世に居なかった。

到頭旦那も倅の死目に逢わずにまいであつたのだ。

倅の娘も暇を取って行つた。「御靈さま」はまだ自分等と一緒に居て下さるとおげんが思つたのは、旦那にお新を逢わせることの出来た時だつた。けれども、これほどのおげんの悦びもそう長くは続かなかつた。持つて生れた旦那の性分はいくつに成つても変らなかつた。旦那が再び自分の生れた家の門を潜る時は、日が暮れてからでなければそれが潜れなかつた。そんな思いまでして帰って来た旦那でも、だんだん席が温まって来る頃には茶屋酒の味を思出して、また若い芸者に關係したという噂がおげんの耳にまで入るようになった。旦那は人の好い性質と、

女に弱いところを最後まで持ちつづけて亡くなつた。遠い先祖の代からあるという古い襖も慰みの一つとして、女の臥たり起きたりする場所ときまつて居たような深い窓に、おげんは茫然とした自分を見つけることがよくあつた。

考えまい、考えまいと思ひながら、おげんは考えつづけた。彼女は旦那の生前に、自分がもつと旦那の酒の相手でもして、唄の一つも歌えるような女であつたなら、旦那もあれほどの放蕩はしないで済んだらうか、と思ひ出して見た。おげんはこんなことも考へた。彼女と旦那の間に出来たお新は、幼い時分に二階の階段から落ちて、ひどく腦を打つて、それからあんな發育の後れたものに成つたとは、これまで彼女が家の人達にも、親戚にも、誰に向つてもそういう風にばかり話して来たが、実はあの不幸な娘のこの世に生れ落ちる日からはやあゝいう運命の下にあつたとは、旦那だけは思ひ当ることもあつ